

過去の自然体験が里山保全への意識と行動に及ぼす影響

The effects of past experiences in nature on consciousness and behaviors for “satoyama” conservation

○中村安希^{*1)}、栗島英明¹⁾

Aki Nakamura, Hideaki Kurishima

1) 芝浦工業大学

*107094@sic.shibaura-it.ac.jp

1. はじめに

人類が生態系サービスを将来にわたって持続的に受け続けるためには、生物多様性の保全や自然環境との共生が必須である。近年、豊かな自然環境や生物多様性ととも

に特有の文化的価値を有する里山の保全が求められる。里山を保全していくためには、里山保全行動への参加を促す適切な情報提供が必要となる。情報にはさまざまな形があるが、中でも五感で受け取った情報が複雑に混ざり合う自然体験という情報の効果は高いと予想される。

自然体験の効果に焦点を当てた先行研究はいくつか見られる。宮川ら¹⁾は、子どもの頃の家庭環境・自然体験が大学生の環境配慮行動や社会活動の実践に影響を及ぼすことを示した。岡田ら²⁾は、少年期の組織キャンプにおける体験が、成人期の環境行動に影響を及ぼすことを示した。しかしながら、環境全般に対する意識・行動を扱った研究は多いが、里山保全と自然体験を直接的に結びつけた研究はほとんど見られない。また、幼少期や現在といった特定の時期、キャンプや宿泊農業体験などの特定の体験を扱った研究はあるが、過去から現在に至るまで蓄積された体験を検討した研究は少ない。さらに、先行研究で抽出された独自の自然体験項目は、網羅性・信頼性・客観性に欠けており、改善が必要である。

以上を踏まえ、本研究では、過去の自然体験が里山保全への意識と行動に及ぼす影響を、より網羅性・信頼性・客観性の高い方法で検証することを目的とした。

2. 研究方法

自然体験を多く積んだ人ほど里山保全行動への意図が高いという仮説を立て、関東在住の20~69歳の一般市民を対象に自然体験と行動意図についてインターネットアンケート調査を実施した。有効回答数は864となった。

自然体験の質問では、国立青少年教育振興機構による子どもの体験活動に関する調査³⁾の自然体験項目をもとに21項目を作成し、各体験について今までの体験量を5段階でたずねた。

行動意図の質問では、実際におこなわれている里山保全活動や里山保全の先行研究を参考に里山保全行動11項目を作成し、各行動について今後の行動意図を5段階でたずねた。

得られた回答データに探索的因子分析をおこない、自然体験、行動意図のなかの潜在因子を抽出した。次に、共分散構造分析により潜在因子間の関係を分析した。

3. 結果と考察

3.1 探索的因子分析による潜在因子の抽出

最尤法と主因子法の両方の結果を参考にし、因子負荷量0.50以上を目安に項目を選定した。0.50未満でも確認的因子分析により妥当性が確認された項目は因子に含めた。

その結果、自然体験21項目は、因子1「自然ふれあい体験」、因子2「アウトドア体験」、因子3「田舎体験」因子4「農作業体験」の4因子に分類された(表1)。行動意図11項目は、因子1「動的参加意図」、因子2「金銭支払意図」、因子3「情報コミュニケーション意図」の3因子に分類された(表2)。

3.2 共分散構造分析による潜在因子間の関係分析

次に、共分散構造分析により潜在因子間の関係を分析した。モデル適合度とパスの有意性を参考にし、図3のモデルを導いた。

田舎体験は、自然ふれあい体験、アウトドア体験、農作業体験を高めている。田舎体験は、自然の多い田舎的環境で暮らしたり時間を過ごしたりすることで得られる体験で、田舎的環境に長く身を置いた人ほど、自然とふれあう機会、アウトドア的な遊びをする機会、農作業をする機会が多かったことが理由として考えられる。また、田舎体験と他の自然体験の間には高い相関があり、自然ふれあい体験、アウトドア体験、農作業体験を通して田舎体験をした可能性も同時に考えられる。

自然ふれあい体験は直接的に、アウトドア体験は自然ふれあい体験を介して間接的に、動的参加意図を高めている。アウトドア体験が自然ふれあい体験の機会になったためと考えられる。

農作業体験は直接的に、田舎体験は農作業体験を介して間接的に、動的参加意図を高めている。

動的参加意図は金銭支払意図と情報コミュニケーション意図につながり、金銭支払意図は情報コミュニケーション意図につながっている。時間、体力、労力、移動、

金銭などの面での負担を考えると、動的参加意図、金銭支払意図、情報コミュニケーション意図の順に実践へのハードルが低下する。ハードルの高い行動をする意図を持つ意識の高い人が、よりハードルの低い行動への意図を持つことは容易であるためこのような結果になったと考えられる。意図3因子間には高い相関があり、互いに意図を高め合う効果もあると考えられる。

また、農作業体験を多く積んだ人は、里山保全活動としての農作業体験会への参加意図も高いことがわかった。

4. おわりに

本研究の結果から、里山保全行動意図向上に直接有効なのは、自然観察や生物採集など自然ふれあい体験と、農作業体験であることがわかった。これらは、積極的に自然に向き合う体験や、自然と人間が深くかかわり合う体験であると考えられる。その機会をもたらすアウトドアや自然のなかでの遊びも大切であり、田舎的環境に身を置く経験もまた大切である。

自然体験が具体的にどのように行動意図につながるかを知らするためには、里山に対する価値意識を調査する必要がある。また、行動意図に対し実践度は低かった。意図を実践につなげるためには、実践度の差を調査し、実践にまで結び付く自然体験を分析する必要がある。

5. 参考文献

- 1) 宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 廣田陽子, 土生真弘, 青山勲: 吉備国際大学国際環境経営学部研究紀要, 19, (2009), pp.37-46
- 2) 岡田成弘, 岡村泰斗, 飯田稔, 降旗信一: 野外教育研究, 12(1), (2008), pp.27-40
- 3) 国立青少年教育振興機構: “子どもの体験活動の実態に関する調査研究(中間報告)”, (2010)
- 4) 国立青少年教育振興機構: “青少年の体験活動等と自立に関する実態調査(平成20年度調査)基礎集計結果”, (2009)

表1 自然体験探索的因子分析結果

観測変数	因子負荷量			
	因子1	因子2	因子3	因子4
登山・ハイキング	0.15	0.52	0.08	-0.04
海川水泳・ボート	-0.01	0.80	-0.07	0.03
乗馬・乳しぼり・動物ふれあい	0.13	0.51	-0.18	0.21
野外食事作・テント泊	-0.03	0.72	0.17	-0.05
スキー・雪遊び	-0.15	0.79	0.02	-0.01
昆虫・生物採集	0.55	0.31	-0.02	-0.05
植物岩石観察	0.97	-0.07	-0.06	-0.05
野鳥観察	0.85	-0.12	-0.04	-0.01
星や雲眺める・観察	0.52	0.10	0.11	-0.02
山菜・キノコ採り	0.60	-0.03	0.15	0.12
魚釣り・貝を採る	0.40	0.30	0.05	0.04
自然材料で工作	0.60	0.15	0.05	0.04
干物ジャム食品加工	0.12	-0.14	0.36	0.26
米野菜植えてる	0.01	0.02	0.00	0.91
米野菜果物収穫	-0.05	0.05	0.05	0.90
湧水飲む	0.16	0.11	0.55	-0.04
満天の星空	0.02	0.19	0.57	-0.03
自然災害	0.04	-0.01	0.45	0.08
虫刺され・かぶれ	0.24	-0.04	0.42	0.02
ぼっとん便所	-0.09	0.03	0.70	-0.07
まるごと食材料理	-0.06	-0.08	0.58	0.20

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

表2 行動意図探索的因子分析結果

観測変数	因子負荷量		
	因子1	因子2	因子3
農作業体験参加	0.82	0.00	0.02
散策会参加	0.71	0.01	0.20
保全ボランティア参加	0.91	0.07	-0.05
募金協力	0.24	0.73	-0.10
間伐材製品購入	0.01	0.85	0.02
政策支持	-0.04	0.67	0.27
棚田米購入	-0.02	0.59	0.33
周りの人に話す	0.09	0.15	0.69
本・WEB調べる	0.06	-0.04	0.92
新聞テレビ見る	0.02	0.24	0.65
講演会など参加	0.42	0.12	0.39

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

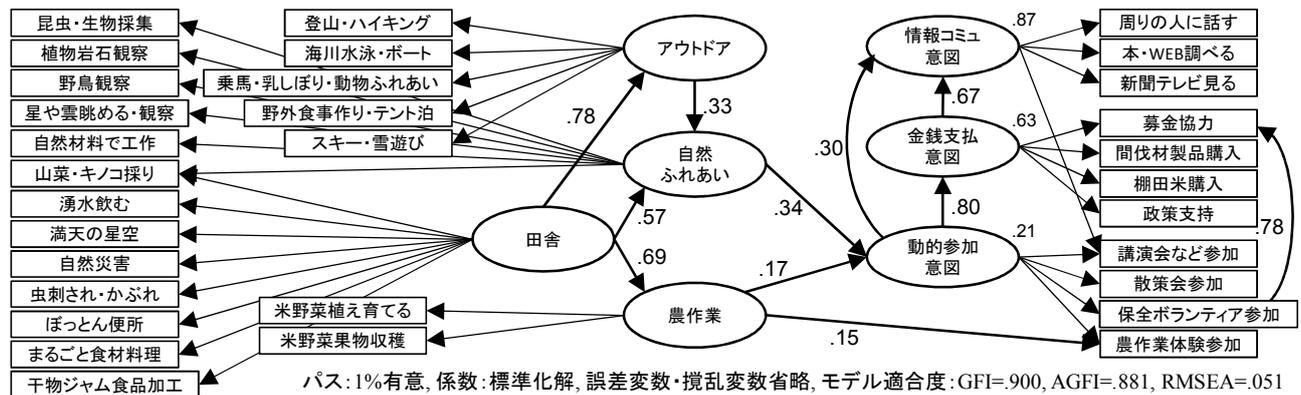


図3 自然体験と行動意図の関係